

編集後記

『社会と倫理』第36号では、**特集**として8本の論考、**投稿論文**として1本の論考、**論説**として2本の論考を収録した。

特集1「移住と人権」では、キリスト教から国際法学までの幅広い観点から「移住」の問題が論じられている。前半2本の論考では、キリスト教の「移住論」が展開される。マリアヌス・パレ・ヘラ氏は、聖書、とりわけ共観福音書およびヨハネ福音書が描き出した移住・移動を軸に、誰もが「よそ者」としてこの世にあることの重要性を論じ、ヤコブ・ライチャーニ氏は、倫理神学の観点から、移民や難民の問題のもつ、ままたまなさを含めた倫理的側面について、現在のカトリック教会の姿勢なども引き合いに、丁寧に説き起こしている。後半2本の論考では、国際法学の観点から日本とインドネシアにおける移住の問題が論じられている。安藤由香里氏は、2021年入管法改正法案の顛末から見える日本における非正規滞在者問題の実態を、特に子どもの人権に焦点を当てて論じている。また、本特集の立案者であるW・S・メレは、インドネシアでのパーム油農産業の勃興に伴い居住地を「公益の名の下に」奪われた先住民族の立退き・強制移動問題について、国際規範の隙間にあって支援を期待できない深刻な「移住の人権問題」として論じている。

特集2「道徳と進化：哲学・倫理学の視座から」は、2020年より当研究所のプロジェクト研究員を務める横路佳幸氏による企画である。前半2本の論考では心理学的な観点で道徳と進化の関係が検討され、後半2本の論考では2000年代後半以降英語圏の倫理学において論争的となっている「進化論的暴露論証」の有効性が吟味されている。石田知子氏は、道徳心理学研究で著名なジョナサン・ハイトの議論を批判的に検討することを通じて、危害の認知と怒りがより基底的な神経基盤でありながら、道徳的なものとそうでないものの明確な区別が見出せないことを示す。他方、千葉将希氏は、進化心理学の研究が、道徳的信念に対比される道徳的亜信念という新たな心的状態の所在を明らかにし、それによって道徳判断の倫理的

解明が進展する可能性を提示する。また、太田紘史氏と横路氏は、シャロン・ストリートが提示した進化論的暴露論証について、それぞれその妥当性と射程を批判的に検討している。両者とも、現時点で展開されている擁護論に対して見通しは悲観的だとしており、道徳と進化との関係の複雑さを示唆している。

投稿論文では、応募された4本の論考の中から査読プロセスを経て1本を収録した。山口晃人氏の論考は、主に子どもの投票権を念頭に置いて、代理投票を規範的に擁護しようとする論考であり、大人のみでの平等投票権と万人の平等投票権とを比較した時、民主政の理想という観点から代理投票がより優れていることを示そうと試みる。

また**論説**として、2本の論考を収録した。第5回社会倫理研究奨励賞受賞者でもある玉手慎太郎氏は、公衆衛生の文脈での自己責任論を退ける理路として、責任概念を「後ろ向き責任」と「前向き責任」に分け、前者を否定しかつ後者を肯定することを提示する。そして、鈴木真氏の論考は、前号掲載の論考の続編であり、倫理的評価が、福利をもその部分として含む個人的価値全般に関わる、という個人的価値主義を提唱し、そのうえで、福利と個人的価値の切り分けが十分に可能であると論証することで、より説得的な帰結主義の可能性を示す、高度に理論的な試みである。

最後に、本号には、8本の**書評**が収録された。本誌の書評は、分野横断的な評者選定を一つの特徴としているのだが、本号では、サケをめぐる環境倫理学・環境社会学の著作に対して、人文地理学者を評者に、また、犯罪者の家族に関する社会学の著作に対して、自死遺族相談の実践者を評者に選んだことを特筆しておきたい。

こうして本号は、充実した2つの特集のほか、力のこもった論考および書評が多く集まり、研究所40周年記念号であった前号に匹敵する総ページ数となった。次の10年に向けた1年目としては上々の滑り出しと言ってよいかもしれない。次号も充実した一冊になるよう動き始めているが、何よりも、本号の論考を起点に関連する議論が盛り上がり上がってくれることを願っている。

W・S・メレ、森山花鈴、奥田太郎